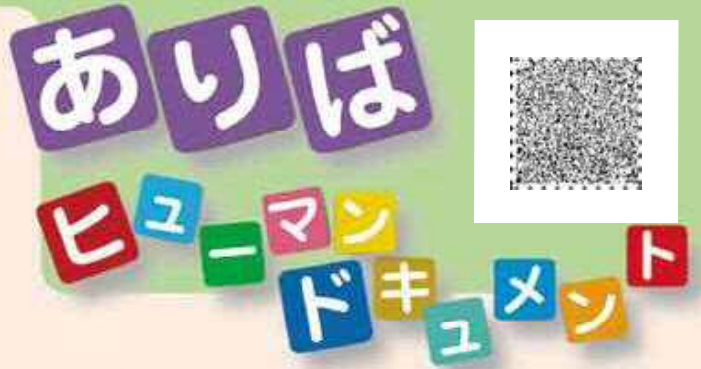




「障害のあるなしに関わらず、誰もが平等に生活できる社会になってほしい。車いすバスケットボールを通して、自分が活動することで少しずつ広めていければ」と石原さん



言語聴覚士  
車いすバスケットボール「薩摩ぼっけもん」

# 【石原 禎人】さん 鹿児島市

## 車いすバスケットボールは仲間を活かすチームスポーツ

車いす同士の激しい攻防戦やスピード感のあるパスワークなど、迫力あるプレーが繰り広げられる車いすバスケットボール。石原禎人さんと車いすバスケットチーム「薩摩ぼっけもん」との出会いは、12年ほど前になりました。当時鹿児島では車いすバスケットチームは他にチームだけという状況でした。そこで、健常者を交えてのチームをつくり、練習を積んだそうです。石原さんは、次第に健常者も障害者も同じ土俵で戦える車いすバスケットの魅力に惹かれていきま

した。車いすバスケットボールの独自のルールの一つに、持ち点制度があります。選手は障害の程度により、重度の1点から軽度の4・5点まで点数を振り分けられ、コートでプレーする5人の持ち点は合計14点以内でなければなりません。また、車いすも普通のものと違い、タイヤがハの字型で固定されている上

に、手がブレイキの役割を果たすなど、激しい攻防戦になればなるほど技術だけでなく体力も要求されます。それでも「バスケットを始めたことで、自分はこの一年はコロナ禍で練習もままならず、「バスケットは仲間と連携しながら仲間を活かすチームスポーツなので、一緒に練習できないのは辛かった。大会はこの一年で1回のみでした」と振り返ります。

## 患者さんが帰りたい場所に帰れるようお手伝いしたい

元々リハビリに興味があった石原さんは、専門学校を卒業後、「食べる」話するという人としての基本行動に関する言語聴覚士の道へと進みました。現在は言語聴覚士として、鹿児島市内にある米盛病院に勤務。リハビリ業務に加えて、作業療法や理学療法も含めたリハビリテーション課のマネジメント業務を行っています。「病气やけ

がの影響で声を出すことが難しくなった方が第一声を発したときや、長い間、何も口にできなかった方が水を一口飲んで「美味しい！」と言われたときなど、その現場に立ち会えたことが何より嬉しい」と話します。

私生活では3人のお父さんでもある石原さん。子どもたちは障害のある人に対し頼まれて手伝うという感覚ではなく、その人が困っていることや望んでいることを汲んで、ごく自然に行動を起こしているそう。

車いすバスケットを通して、医療職としての視野も広がった石原さんは、「患者さんとその家族が望むような生活に少しでも近づけるよう、同じ目線に立った治療を心がけています」と目を輝かせていました。



「2023年に行われる全国障害者スポーツ大会では地元代表として、まずは初戦突破を飾りたい」と石原さん

### 米盛病院

鹿児島市与次郎1-7-1  
TEL 099-230-0100  
FAX 099-230-0101  
<https://www.yonemorihp.jp>

